



配位不飽和 Pt 単原子合金触媒の局所構造解析

織田 晃

名古屋大学大学院工学研究科

キーワード：単原子合金触媒，トルエン水素化，金属-担体相互作用

1. 背景と研究目的

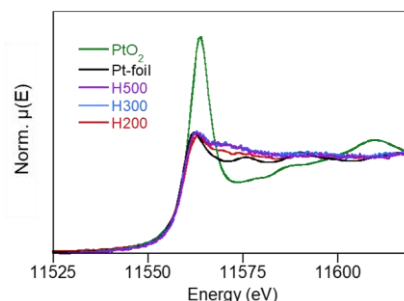
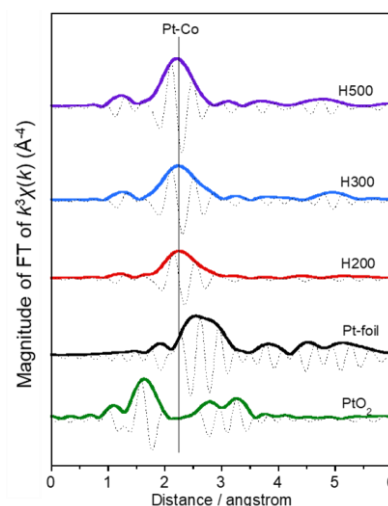
水素社会の実現には水素キャリア技術の革新が必要不可欠である。近年脚光を浴びている水素キャリアとしてトルエン/メチルシクロヘキサン系がある。これら化合物は常温常圧で液体であるため、水素と比べて輸送のコスト及びリスクが極めて低い。更に、既存のインフラを用いて利用できるというメリットももつ。この水素輸送システムを駆動するうえで触媒の利用が不可避である。安定な芳香族環に水素をため込む工程（水素貯蔵）とそこから水素を引き抜く工程（水素放出）の速度論的障壁が高いためである。障壁を革新的に下げ、触媒として安定に機能する高機能性触媒の設計には、これまで、高価な貴金属を多く必要としていた。日本はもたざる国であるため、省貴金属化に資する新たな設計概念が必要である。当研究グループは安定な芳香族環に水素をため込む工程（水素貯蔵）において単原子合金触媒の利用が省貴金属化に資する有効なアプローチであることを最近見出した。単原子合金触媒は最近誕生した新たな触媒群の一つである。金属表面に異種金属を単原子状態で固定することで得られる。卑金属ナノ粒子の表面に高価な貴金属を単原子で固定化して得られる単原子合金触媒は、卑金属ナノ粒子単独では示しえない高機能性を有することがしばしばあり、省貴金属の観点から特に注目を集めている。しかし、これまで、常温常圧で芳香族環を水素化できる単原子合金触媒の設計例はなかった。一方、当研究グループは Co ナノ粒子表面に Pt 単原子をごく少量配置することで、ベンチマーク触媒の Pt 質量比活性を大きく上回る性能を創出できることを見出した。更に、Co ナノ粒子を分散させるために用いる担体の種類と水素還元温度によって触媒性能を更に向上できることを見出した。本研究では担体と還元温度が触媒性能に及ぼす影響を構造の観点から理解を深めることを目的とし、異なる温度で還元処理した TiO₂ 担体上の PtCo 単原子合金の局所構造を in situ XAFS によって調べた。

2. 実験内容

6 wt% の Co を担持させた TiO₂ を大気下で焼成後、水素還元し、Co ナノ粒子担持触媒を得た。これに対して、大気非暴露下で 0.1 wt% の Pt 塩水溶液を滴下し、ガルバニック置換を行った。これにより Co ナノ粒子表面原子と Pt が置換される。ガルバニック置換後、大気暴露して保管するため、PtCo は酸化されてしまう。これを触媒として利用する際には水素還元処理が必要である。この還元温度と構造との関連性を理解するために、異なる温度で還元処理した PtCo 触媒の in situ XAFS 測定を行った。Pt L_{III}-edge を測定対象とし、Si(111) モノクロメーターを用いた。XAFS スペクトルの解析には Athena を用いた。

3. 結果および考察

Fig. 1 に PtCo/TiO₂ の XANES スペクトルを示す。200～500℃で水素還元した触媒はすべて Pt-foil と同程度の whiteline 強度を示した。これは水素還元温度に関わらず、Pt は金属状態であることを意味する。Fig. 2 に FT-EXAFS の結果を示す。水素還元温度によらず、Pt-Co 後方散乱のみが 2.1 Å 付近に観測された。Pt-Pt 後方散乱は観測されなかった。即ち、Pt 単原子合金は水素還元温度に依存せず合成できる。これら触媒についてトルエン水素化活性を評価すると、500℃で水素還元した触媒のみ極端に低いトルエン水素化活性を示すことがわかった。この低活性の要因は局所構造だけでは説明できなかった。よりマクロな構造因子、例えば PtCo ナノ粒子への担体 TiO₂ の被覆 (Strong Metal Support Interaction: SMSI) が要因として考えられる。

Fig. 1 Pt L_{III}-edge XANES.Fig. 2 Pt L_{III}-edge FT-EXAFS.